

第三回広島平和学習の旅

ミネソタ州立大学モアヘッド校
外国語・外国文化学部 学部長
三田高敬（教育学博士）

旅行日：3月13日から19日。

参加者：学生12名、引率者1名。

旅行学習期間：1月13日から3月11日までの9回と旅行後の2回。

学習資料：はだしのゲン、原爆に関する抜粋論文、映画「八月の狂詩曲」

前回の旅行と異なる内容

1. 広島市民と触れ合うことを第一目的とした。
2. 第二回に実施した学生の意識調査を実施しなかった。
3. 映画「ジ・エンドオブパールハーバー HIROSHIMA 運命の日」を「八月の狂詩曲」に変えた。
4. ノースダコタ州にある1980年代まで機能していたミサイル発射基地を2月27日に見学した。

内容を変えた理由

1. 博物館で展示されたものを見るだけでは、現在の広島市民・被爆生存者の核に対する感情は理解し難い。
2. 被爆・原爆投下の憎しみ・悲しみを訴えるだけでは世界の人々から共感を得られない。特にアメリカ人に原爆の悲惨さを訴えるには異なる方法を考えなければいけない。
3. 意識調査を実施すれば、無意識に自国の核爆弾投下を擁護してしまう。原爆の知識も浅い学生に心境の変化があったことを前提に問えば、身構えて矛盾した回答をする。
4. 隣接する州にある冷戦時代のミサイル基地を見ることで、広島、長崎に核投下し、核の脅威を知るアメリカがソ連の攻撃に備え、その防備に真剣だったことを知る。
5. 原爆投下の歴史の解釈よりも、その悲惨さを知らない世代が生存している被爆者・被災者たちの気持ちを理解する映画の方が今の世代の人たちに適していると考えた。

学生達の心の変化

過去2回の旅行の時と同じように、広島市民がアメリカ人に反感を持っているだろう思っていた学生が多くいた。前回同様、現実と想像との違いに驚いていた。今回は直接中学生、大学生、ボランティアで平和記念資料館や広島城の案内をしてくれた人たち、本通りの通行人、店の人達とのふれ合いで、普段の広島市民の生活を知り、参加者達の心は驚きから親しみ、悲惨な過去の理解へと発展した。

参加者の多くは平和をもたらす原動力は「国民教育」にあると考えるようになった。広島の大學生との話し合いの中で、「核の根絶は時間がかかる。しかし、一人、一人ができることをやる。国としては教育で核戦争の恐ろしさを国民に知らしめなければいけない」と主張していた。ある参加者は旅の日記に次のように記していた。

平和公園や宿泊施設の周りを散歩しながらあの日の核爆弾が投下された状況を想像していた。平和公園からアステールプラザまで歩いていると、なにか気配を感じた。原爆投下地点に立ち、その核爆弾投下の瞬間を想像した。あの日は上を見上げると、火の玉があり、そして消えたのだろう。その場所にはだれかがいた。その人は人生最期の瞬間に何を考えていたのだろうか。アステールプラザの横にある川に死を逃れた人たちが水を求め川に押し寄せたなんて、現在の広島からは想像もできない。被爆者の証言を自分が体験したように自分の言葉で言い表しても、被爆者の重みある言葉とは比べようもないものになってしまう。

別の参加者も平和公園からアステールプラザまでのいつもの散歩道で、帰国する前夜にあの8月6日に起こったことを想像していた。

爆心地から1キロメートルで生き残った人ができることはほとんどない。放射線被爆が人の命を奪うのは瞬時のことだから。この美しい現在の広島からは想像し難いことだ。だから、本当に恐ろしい出来事だったのだ。人間はほとんど何でも好きなように物事を成し遂げるけど、お互いを助け合うのでなく傷つけあう結果によくなってしまうのは、残念なことだ。友達と川のそばに立ち、地面に手で触れると涙がこぼれてきた。あの日の広島の市民の苦しみを思い浮かべてみた。この旅行に参加するまで核爆弾の人への影響を考えたことはなかった。私の心は変わった。このことを他の人たちに知らしめよう。私は広島の悲劇を決して忘れない。

まとめ

今回は通常の平和学習の内容に沿わず、過去2回の旅行の反省から「アメリカ人のための平和教育」として考え、「広島の人たちとの交流を通して平和を考える」活動を入れてみた。新しく取り入れた内容は参加者に広島の惨事を知るのによい効果をもたらしたと思う。

戦争の主な原因はお互いの国民を知らなかったり、故意に間違った情報で自国民に相手の国に反感を煽らせることだった。相手の国民に親しみを持てば、最悪の兵器を使っても武力戦争になりにくいはずだ。オバマ大統領の「核のない世界」はアメリカではあまり共感を得ていない。何故だろうか。それは、核の恐ろしさを国民が知らないからだ。アメリカ政府は過去60数年核投下の正当性を繰り返しているのだから、アメリカ国民は広島・長崎に核を使ったアメリカの卑劣さを問題にするより、落とした個数に関心がある。一つでよかったか否か等。核の危険を

教える国民教育の欠如が「核のない世界」というすばらしいオバマ大統領の政策の後押しを妨げている。核軍縮の遅れは原爆投下の正当性の繰り返し、広島・長崎の被害の状況を自国民に知らせなかったアメリカと、原爆を投下したアメリカの責任を問わず、日本に戦争責任を求め続け、その影で核開発に力を入れた国々にもあるのではないかと思う。一旦許したものは広がり続け、それを阻止することは容易ならざるところに来ている。アメリカの銃規制みたいなものかもしれない。つまり、銃によって潤う産業、それらの企業から政治資金をもらう政党、銃が蔓延してその恐怖から自分を守る正当性を主張する人、地理的に他国からの銃の流入を防ぐのが難しい状況、銃の所有権利を明記した開拓時代の合衆国憲法を改定することが現実的に恐ろしく、不可能に近いとあきらめている国会議員等。

「銃は悪くない。銃の引き金を引く人間が悪いんだ」は銃規制反対の人たちがよく言う台詞だ。この論理は「核爆弾は悪くない。核爆弾のボタンを押す人が悪い」と言い換えられる。この論理だと核兵器を規制せず、抑止力として核兵器開発を正当化してしまう。このアメリカの社会論理が「核のない世界」を積極的に擁護しない理由のひとつであろう。よって、アメリカ国民に核兵器問題に目を向けさせるには、従来の核の被害を見せるばかりでなく、違ったアプローチも考えなければいけない。

今回の「平和学習旅行」の目的は、幅広い年齢層の広島市民と接することにより、広島の人達に親しみをもち、大きな心で過去の核投下をもたらした惨事に向き合うことだった。参加者の中には平和記念資料館の展示物、被爆者の話に心から向き合えない者もいた。「みんな同じことを言う。こういう同じことの繰り返しは聞く者を飽きさせる。将来への展望がない」と日記の中で言っていた。私はこの参加者に「みんな同じことを言うのは、すべてが一瞬に起きたことだからだよ。どこかの独裁者が国民に命令して言わせているのじゃない。同じことを言うのは、広島市すべてが一瞬にして変わってしまう兵器が使われたからだよ。」とコメントを書いた。この参加者は帰国する前の日にもう一度平和公園を訪れ記念碑を見て心を整理していたが、平和記念資料館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は再び入らなかった。広島の悲惨な出来事を知らされることは、アメリカ人には他の国民にないものを強く感じるのだと思う。

「広島平和学習の旅」を私が主催する意義は、多くのアメリカ人が広島・長崎の惨事を知って、将来どこかの国と危険な状態になった時、核の使用を選択肢に入れない政治家、その使用を強く反対する一般市民になって欲しいからだ。